(アジア文化叢書・2)

ネパール短編小説集

ナソ・忘れ形見

グルプラサッド・マイナリ著　野津治仁 訳・注

नासो (Naso)

पसल नेपाली कागज पसल नेपाली
नेपाली कागज पसल नेपाली कागज
नेपाली कागज पसल नेपाली कागज पसल नेपाली काग
नेपाली कागज पसल नेपाली कागज पसल

アジア文化叢書・2

ナソ・忘れ形見
——ネパール短編小説集

グルプラサッド・マイナリ著
野津治仁　訳・注

穂高書店

〈訳者略歴〉

野津　治仁（のづ　はるひと）

昭和35年１月，奈良県天理市に生まれる。
北九州大学文学部英文学科卒業。
昭和58年２月～60年２月，ネパール，トリブバン大学に留学。
昭和63年８月より同大学に再留学。
平成２年８月B.A.修了。
現在同大学大学院（修士課程）にて，ネパール語・ネパール文学を専攻中。
日本ネパール協会会員，日本南アジア学会会員。
ネパール児童文学協会（ネパール）会員。
訳書，「観光ガイド・ネパール」（ネパール政府観光局）他。
現住所，P.O.Box 447, Kathmandu, Nepal.（天理市田町112-7）

ナソ・忘れ形見――ネパール短編小説集
グルプラサッド・マイナリ著　野津治仁訳・注
（アジア文化叢書・2）

1992年１月26日　印刷・発行（初版，第一刷）
定価1,957円（本体1,900円）

訳　者　野　津　治　仁
発行者　青　柳　　健
印刷製本　新文豊出版公司
発行所　株式会社　穂高書店
〒101 東京都千代田区神田神保町２の23
Tel.3263-7601(代)　Fax.3263-7602

ISBN4－938672－11－1
©Haruhito Nozu
Printed in Taiwan.

目次

原著まえがき……3
日本語版への序……4
一、忘れ形見（ナソ）……7
二、ご近所……26
三、つぐない……34
四、罪の報い……46
五、さよなら……79
六、干し草の火……96
七、幸い薄き人生……110
八、殉国者……128

九、つとめ……151
十、里がえり……165
十一、火葬台の焔……185
訳注……209
訳者あとがき……222

表紙絵・藤江幾太郎
挿　絵・キルティキショール・ジョシ
装　幀・河田安夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

原著まえがき

本書には十一編の社会短編小説が収められている。このうちの多くは一九五一年の人民革命以前に書いたものである。「忘れ形見」は一九二七年に、「干し草の火」は一九四五年に書いたが、このことは作品に描写されてある当時の国の様子からはっきりうかがえる。

一九五一年以降に書いたものもいくつかある。これらの作品はもっと早く読者の皆さんの前に発表しなければならなかったのだが、なにぶん永い年月宮仕えの身であったため、発表する間がなかったのである。ようやくお目にかけることができた。

六、七編は執筆当時の雑誌や短編集に発表済みであるが、著作権を誰にも渡していないことと、特に自身の作品であるということから、発表済みの作品も本書に収めている。

多くの作品はわたし自身が、または近くから見聞きした社会の風景をもとに書いている。二、三編はわたしの空想のものである。

ともかく、本書が文学に興味を持つ人々にとって、暇つぶし、または新しい創作への示唆になれば、わたしのこの小さな努力が報われる。

グルプラサッド・マイナリ

日本語版への序

マイナリの短編小説

ネパール文学における近代覚醒は、ビクラム暦一九九一年（西暦一九三四年）にカトマンズで創刊された文芸誌『サーラダ』に始まる。短編小説の分野においても同様、この時から希望の光明が広がることとなった。ダージリンのループナラヤン・シンハは『サーラダ』誌の出版より数年前から、すでに近代的手法による短編小説を書き始めていたのではあるが、グルプラサッド・マイナリの「忘れ形見」など好評を得た短編小説は『サーラダ』誌に掲載された。そしていみじくもこの短編小説の出版は、ネパール短編小説の輝かしい未来を予言することとなった。

ビクラム暦二〇〇七年（西暦一九五一年）の革命より以前、ネパールではラナ一族の専制政治が行われ、全ての出版に関する手段が規制されていた。人民が覚醒し、自由な表現をおし進め、叛旗を翻すのではという恐れから、ラナたちは「ネパール語出版委員会」を設立した。この委員会が原稿を検閲し、許可したものに限り出版が許された。

まず第一に教育不在のため読者層というものが無かった。第二に本を書いて出版しようという意欲をかきたてるものが作家にもなかった。一、二の詩人、作家を除いて多くの才能ある文学者は、二、三の作品を『サーラダ』誌に発表してあとは沈黙していた。グルプラサッド・マイナリのよう

な才能ある作家も、こうしておとなしくしていたのである。もし出版の環境が整っており、著述に対して何の障害もなかったならば、マイナリはもっと多くの美しい短編小説をわたしたちに残していてくれたことだろう。

このような困難な状況にあって、マイナリは十一編の短編小説を書いた。わたしはマイナリの生前に、その短編小説を一堂に集めて編集する機会を得た。人生で最も活動的な時期を彼は小説家としてではなく、裁判官としてすごさねばならなかった。引退したマイナリに会い、ネパール人の生活を至近距離から理解している第一人者に出会った思いがした。しかし、ネパール人が創作活動の自由と出版の環境を得た時には、彼は年老いて病魔に冒されていた。既に遅かったのである。

「時というのは駿馬である。それは常に疾走し続けるのだ」　マイナリの活動力も寄る年波には勝てなかった。しかし、数少ないとはいえ、彼は珠玉のような光輝く作品を残した。それは決して滅ぶことなく、「時」によって侵されることもなかった。その不滅の短編小説を収集したのが短編集『忘れ形見』である。

裁判官として人生を送ったグルプラサッド・マイナリは、ネパール民衆の困難と苦しみを近くから観察し、経験し、自分のこととすることができた。特に彼は田舎の善良で無力な貧しい民衆のことを良く理解していた。情勢のために無力とならざるを得ない中間層の男女、不正と暴虐のために苦しむ貧しい小作人、日雇い人夫、農民、又悪習と因習にさいなまれている女性などがマイナリの登場人物である。マイナリの短編小説におけるネパールの田舎の暮らしぶりの表現は、なかなか的

を射ているといえる。平易な言葉、哀愁にみちた文調、美しい表現に卓越したマイナリは、ネパール文学の永く記憶にとどめられるべき宝石である。

ネパール短編小説界にあって異彩を放つ星、グルプラサッド・マイナリの短編小説は、日本の読者にネパールの文化、民衆の生活、ネパールをとりまく状況を、充分に紹介してくれるものと思う。マイナリがペンを進めるにあたり基にした出来事は、外面的にはいく分変化があるかもしれないが、ネパールの田舎においては現在でも同様の苦痛、同様の苦悩、同様の状況が旧態依然としてあるので、マイナリはもう古臭いというのは当を得ていない。このことを念頭においてマイナリの短編小説を読んでいただきたい、というのが日本の読者の皆さんに対するわたしのお願いである。

最後に、わたしの愛する短編小説作家マイナリに惹かれ、彼の短編小説を日本語に翻訳し、世に送る野津治仁氏にわたしは喝采を贈りたい。なぜなら氏の努力によってネパールと日本の友好関係がより堅く、より豊かなものになるということを信じて疑わないからである。

タラナート・シャルマ
（文芸評論家・文学博士）

忘(ナ)れ形(ソ)見

一、忘れ形見

1

家の中には財産が有り余るほどあったが、デビラマンには子供の無いのが玉にきずで、子供が授かりますようにと、できることは何でも試みた。善根を積みさえすればと、旅人のためにはチョウタラ①を建て、道行く人のためには道普請をしたり、パシュパティナート寺②にお詣りして、万灯明を献じもした。去年などはハリヴァンシャ・プラーナ③まで唱えてもらった。それでも愛妻スバドラに子宝は恵まれなかった。近所の連中とやり合うようなことがあっても、金銭の面でも頭脳の点でもデビラマンに勝てる者はいなかった。ところが「子無し！」と一言浴びせられた途端に、彼の誇りは消し飛び、青菜に塩のように、しゅんとなってしまうのである。彼は子がなければ一家の主としての面目が保てない、とする旧思想の持ち主だったからである。

かわいそうにスバドラはいつもそのことを気に病んでいた。彼女は近所の女房たちが子供を遊ばせているのを見ると羨ましくてしかたがなかった。子供が欲しい女性が誰でもするように、彼女も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

祈禱師からもらったお守りを後生大事に肌身につけ、あちこちの神様に願を掛け、お寺参りは欠かさず、断食の行すらいとわなかった。これだけ尽くしても神様がお聞き届け下さらないというのなら、他にどんな効き目のあることがあるというのか！

占星術師はデビラマンに二人目の奥さんをもらいなさいと勧めた。しかしそれは妻の同意を得ない限り不可能であった。彼女は夫に忠実な女性で、今まで夫の心を苦しめたことなど、ただの一度もなかった。夫が何か口に出して言うより前に、さっと気を利かして世話を焼いてくれるような良い女房である。彼のまぶたには今でも、彼女が嫁いで来た頃の惨めな暮しぶりがありありと浮かぶ。あの当時を思い起こす度に彼の目には涙が溢れた。裸一貫同然だった彼が、ここまで出世できたのも、苦労を共にした彼女の内助の功があったればこそである。そういう訳で、子供が無いからといって、今さら新しい女房をもらうなんて恩知らずなことがどうしてできようか！

2

ファグン月(4)のある朝、心臓を突き抜けそうな寒風が吹きつのっていたが、デビラマンは花嫁と共に祭式の座についていた。バラモン僧(5)たちはヴェーダ(6)の賛歌を唱え、聖火に供物を献じていた。この齢になって彼を再び花婿に仕立て上げたのは運命のいたずらであった。その昔彼は今日と同じようにパニグラハンの儀式(7)によってスバドラと結ばれたのである。妻の同意を得たかどうか

はさておき、彼はこの儀式を再び繰り返したのである。今度の結婚が開運になるかどうか、彼には知る由もなかった。わずか十二歳のおぼこ娘を連れてきて彼は虚空に空想の世界を築こうとした。不二一元論者[8]ならば、おそらくこれを希望の陥穽とか蜃気楼と呼ぶだろう。

ヒンズーの教えに無理に強いられたのか、己れの内心に駆り立てられてやったのかは分らないが、とにかく結婚の儀式は滞りなく終わった。嫁送りの段になって、新婦側の人たちが泣きながら花嫁を輿に詰め込むと、中から花嫁の泣き声が洩れてきた。デビラマンにはそれが不快でたまらなかった。行列の人々[9]は道中下品な冗談を飛ばしながら笑い興じていたが、デビラマンの心中にはまた新たな葛藤が生じていた。「スバドラは本心から承諾してくれたのだろうか？　なぜそっぽを向いたまま、いいわよ、と言ったりしたのであろうか？　おれがあんまりしつこく言うもんだから、仕方なく同意したんじゃあなかろうか？　人間は己れの願望を満足させるために、このような無理強いをする事が、許されるものであろうか？　おれに対するスバドラの生涯かけての献身の報いがこういうことでよいのか？　ちきしょう！　一体どうすりゃいいんだ！　おれが悪いってのか？　だってヒンズー教では、子供の無い者には天国への門は閉ざされていると教えているじゃないか。おれはすけべえ根性から若い女房が欲しいんじゃない。ヒンズー教の教えに従って結婚したまでなんだ」そう思い込むことによって自分を納得させようとした。

新郎新婦の行列が自宅の近くまで来ると、村人たちがチョウタラに集まって見物していた。デビラマンは目をこらしてその群れの中にスバドラの姿を探し求めたが、彼女の姿はそこに無かった。

彼はほっとした。今日の彼は、まるで学校へ行く日を忘れていたのを思い出して、学校へ遅刻してきた子供のような気持ちでもあり、知人に出くわしてそそくさと逃げ隠れしようとする、犯罪者のような素振りでもあった。

隣人たちと話をする風を装って、彼はわざと少し行列から遅れた。見るとスバドラはもう花嫁を家の中に入れ、楽隊や輿(みこし)かつぎの連中に祝儀を配っていた。彼の心は喜びに踊り、心の中で呟いた。

「彼女はまさに女神だ！　彼女の心を疑うなんてつまらないことをしたもんだ。チェッ！　人間というのは自分で自分のしたことにびくびくするんだからな」

招待客と長時間雑談したのち、デビラマンは夜もおそくなって、やっと寝室に入った。ランプには芥子菜(からしな)油の灯りがともっていた。花嫁のラッチミはベッドの下の方に布団を敷いて寝ていた。それは今までスバドラが寝ていた所である。彼はベッドに上がって横になったが、スバドラと共に二十年以上も使ってきた寝室が、彼女がいないとなると何か奇異な感じがした。しばらくすると家事を終えたスバドラが入ってきて、デビラマンの脚をもみ[10]始めた。それが彼女の日課で、彼女の按摩の腕前には文句のつけようがなかった。デビラマンが言った。

「おい、お前の布団はどこなんだ？」

「あっちの部屋よ」

「なぜあっちの部屋へ移したんだい？」

「明日は十一夜(エカダシ)[11]でしょ。朝早くからガンダキ河[12]へ沐浴に行くの」

「おれもそっちで寝るよ」
「まあ、そんなこと言って。こっちで寝てくださいな」
朝早くからの行事に疲れ切っていたデビラマンはそのまま寝入ってしまった。スバドラは自分の刺子の掛布団を継妻（ソウタ）の上に掛けてやると、向うの部屋へ行った。ノウリ・ガルティニーがくすんだ灯火のほのかな明りのなかで、葉を縫い合わせて皿を作っていた。ノウリはスバドラと同年輩で、この家の古い女中である。ビクラム暦の一九八二年[3]に故チャンドラ・シャムセール・ジャンガ・バハドゥル・ラナ大王の慈悲により、解放された奴隷である。女中として永年働いてきたので、デビラマンは政府から支給される彼女の解放料を受け取らなかった。自由の身になっても、彼女はこの家から出て行かなかった。ノウリは幼時からスバドラの家で使われていたから、スバドラとは何でも甘酸を分け合ってきたのである。いうなれば彼女は創造神がスバドラに与えた苦しみの受け皿であった。だから二人は堅い絆で結ばれていた。ノウリが樹の葉を縫い合わせながら言った。
「奥様、今日はほんとにいやな思いをなさったことでしょうね」
「どうしてそんなことを言うの？　何がいやなって？」
「だって奥様、『継妻（ソウタ）は悩みの種』ってよく言うじゃありませんか。今日夜具を明け渡したら明日にも奥様の方が出て行かなければならない、なんてことになりかねませんよ」
「出て行かなければならないんだったら出て行くわよ。あたしがこの家の財産の上でふんぞりかえっていたとでも言うの？　長い間、嫁としての勤めに明け暮れてきたんじゃないの。なあにどこへ

行ったって、飯炊きでもしてりゃ食べて行けるわよ。でもあの娘、わりと素直な娘らしいわよ。家に入るなりあたしの足に額をこすりつけ[1]て挨拶したわ」

「そうしろと教え込まれてきたに決まってますよ、奥様。いずれその内にノウリが言った通りだとおっしゃるでしょうよ。素直な娘が歪んだ娘になるのに、手間暇はかかりませんよ。遠からず旦那様の髪の毛を引っ摑み始めることでしょうよ」

「なにはともあれ、ああ神様！　私めに永遠の生命を与えて下さいまし。この目で一家の繁栄を見ることが叶いますように！　子供がいたらきっとあたしの死に水を取ってくれることでしょう。あたしのたった一つの望みは、息子の膝の上で息を引き取りたいってことだけなの、ノウリ」

3

三、四年後のある日、デビラマンの家ではスバドラが息子のスシルに御飯を食べさせていた。スシルは庭先で餌をついばんでいる鳩をつかまえようと夢中だった。スバドラが一口分の御飯を手にして、

「おまんま、まんま、どの子に上げよかなあ」と言うと、スシルはあーんと口を開けて走ってきた。スバドラが一つかみ放り込むと、子供はまた鳩の方へと駆けて行った。ものが言えないその小鳥たちも、子供と一緒になって楽しそうに遊んでいた。スシルが捕まえようとすると、鳩は前方へぴょ

んと少し跳ぶ。スシルがそこへ行くと、またちょっと跳んで逃げ、また餌をついばみ始める。スシルはスバドラの「おまんま、まんま、どの子に上げよかなあ」の声を聞く度に、一口、二口の御飯を頬張ってまた鳩の所へもどって行くのだった。

デビラマンは最高の幸福感に浸りつつ、木製のベンチに腰をかけて我が子の戯れを眺めながら、「おれの御先祖様もきっと天国の端っこで、自分の末裔の遊びをご覧になって満足していらっしゃるに違いない」と思っていた。彼はこの小児の背後に何か秘められた巨大な力の存在を感じていた。子供が欲しくてたまらなかったデビラマンは、こうしてついに宿願を達成できたのである。

しかし諸行は無常、有為転変は不可思議なもの。神様はとかく微笑んでいる者を泣かせ、涙している者を笑わせることがある。

ある日のこと、スシルはトゥルシの祭壇[15]の傍らで遊んでいた。軒下の一方からはラッチミが、もう一方からはスバドラが手を差しのべて、「坊や、どっち？　坊や、どっち？」と呼びかけた。スシルはちょっととまどった後、スバドラの方に駆け寄って、胸にすがりついた。スバドラの胸は汚れなき慈愛に満ち溢れていた。

「わたしの可愛い王様！」と言って彼女は息子に口づけした。

ラッチミはスシルを産んだというだけで、実際に育てたのはスバドラだった。スシルはスバドラから片時も離れなかった。彼はスバドラのことを「お母さん（アマ）」と呼び、産みの母親を「お嫁さん（ドゥラヒ）」と呼んだ。ラッチミは家じゅうで「花嫁奥さん（ドゥラヒ・バジャイ）」と呼ばれていたからである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com